中国英语教育史研究

ZHONGGUO YINGYU JIAOYUSHI YANJIU

崔春花 著

大连海事大学出版社

ZHONGGUO YINGYU JIAOYUSHI YANJIU

ISBN 978-7-5632-2799-0

9 787563 227990 >

定价:29.00元

中国英语教育史研究

崔春花　著

大连海事大学出版社

© 崔春花 2012

图书在版编目(CIP)数据

中国英语教育史研究 / 崔春花著. — 大连 ：大连海事大学出版社，2012. 12
ISBN 978-7-5632-2799-0

Ⅰ. ①中… Ⅱ. ①崔… Ⅲ. ①英语—语言教学—教育史—研究—中国
Ⅳ. ①H319-092

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 288611 号

大连海事大学出版社出版

地址：大连市凌海路1号 邮编：116026 电话：0411-84728394 传真：0411-84727996
http://www.dmupress.com E-mail：cbs@dmupress.com

大连美跃彩色印刷有限公司印装 大连海事大学出版社发行

2012 年 12 月第 1 版 2012 年 12 月第 1 次印刷
幅面尺寸：185 mm×260 mm 印张：14.75
字数：303 千

封面设计：王 艳 版式设计：弋 雅
责任编辑：席香吉 责任校对：刘若实

ISBN 978-7-5632-2799-0 定价：29.00 元

前　言

2001年我留学日本，主攻英语教育史。在系统学习日本英语教育史的过程中，我发现中国学者对于本国的英语教育史研究起步较晚。付克先生的《中国外语教育史》(上海外语教育出版社，1986年)是关于中国英语教育史研究的最初成果，此书以中国俄语教育史为主，探讨了包括英语在内的中国外语教育发展历史。而李良佑、张日昇、刘犁共同编著的《中国英语教育史》(上海外语教育出版社，1988年)则是国内第一部以中国英语教育史为研究核心的学术著作。

相比之下，日本学者对于该国的英语教育史研究起步较早，早在20世纪30年代，已有包括荒木伊兵衛的《日本英学发达史》(创元社、1931年)，豊田實的《日本英学史研究》(岩波书店、1939年)等在内的5部著作问世。在此后近90年的研究当中，日本学者们对本国的英语教育历史，特别是早期英语教育史展开了相当深入、细致的研究，并取得了丰硕的成果。可是关于中国早期英语教育的研究却少之又少。依本人浅见，目前国内学术界对于中国早期英语教育史的研究还仅处于起步阶段，虽有一些专著和论文对中国早期的英语教育状况有所研究，但所述比较零散或限于单一方面。比较典型的专门、系统、完整描述中国早期英语教育史的论述仍相当少见。

本书在注重吸取前辈研究成果，并且在所收集的大量原始材料及中外图书期刊资料的基础上，通过追溯中国英语教育的源流，分析、考证草创时期英语学习工具书及英语学习群体，进而考察了早期教会学校及官立学校的英语教育。

本书所研究、探讨的问题难免有遗漏或错误，敬请语言界和英语教育界的专家、学者、前辈予以批评指正。

崔春花

2012年12月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

序　論　中国における英語教育史の研究の動機と課題 …… 1
1 研究動機と研究課題 …… 1
2 論文構成 …… 3

第1章　英語教育の草創期—ピジン英語時代 …… 5
第1節　マカオ・ポルトガル語—ピジン英語の前身 …… 5
1　マカオ・ポルトガル語の発生 …… 5
2　マカオ・ポルトガル語に関する記述 …… 7
第2節　広州英語—前期のピジン英語 …… 12
1　広州英語の発生 …… 12
2　広州英語に関する記述 …… 16
3　広州英語の特徴 …… 19
4　広州英語の学習者 …… 25
第3節　上海英語—後期のピジン英語 …… 35

第2章　ピジン英語時代の英語学習書 …… 44
第1節　「紅毛」類広州英語用語集 …… 44
1　「紅毛」類広州英語用語集に関する記述 …… 44
2　「紅毛」類広州英語用語集 …… 48
第2節　ロバート・トムと『華英通用雑話』 …… 54
1　ロバート・トムについて …… 54
2　『華英通用雑話』 …… 55
第3節　唐廷枢と『英語集全』 …… 59
1　唐廷枢について …… 59
2　『英語集全』 …… 62
第4節　その他の英語学習書 …… 66
1　『華英通語』 …… 66
2　『英話注解』 …… 68
3　『英字入門』 …… 71
4　『英字指南』 …… 73

第3章　教会学校における英語教育 ……79
第1節　教会学校における英語教育の第1期（1807～1842年） …… 79
1　英米宣教師と英語教育 …… 79
2　ロバート・モリソンと英華学堂の英語教育 …… 81
3　モリソン教育学校における英語教育 …… 86
第2節　教会学校における英語教育の第2期（1842～1877年） ……110
1　英語教育との絶縁及びその理由 ……110
2　教会学校における英語教育の実施 ……116
第3節　教会学校における英語教育の第3期（1877～1912年） ……120

第4章　官立学校における英語教育 …… 132
第1節　官立学校における英語教育の第1期（1862～1894年） ……132
1　外国語学校の設置と英語教育 ……132
2　洋務学校の設置と英語教育 ……143
第2節　官立学校における英語教育の第2期（1894～1902年） ……148
1　旧式書院の改革と英語教育地位の確立 ……148
2　新式学校の設立と英語教育の実施 ……151
第3節　官立学校における英語教育の第3期（1902～1912年） ……159
1　学制の公布と英語教育体系の確立 ……159
2　小学堂における英語教育 ……164
3　中学堂における英語教育 ……168

第5章　京師同文館における英語教育 …… 182
第1節　京師同文館の創設 ……182
1　設立背景 ……182
2　設立経過 ……185
第2節　京師同文館における英語教育 ……196
1　教師と学生 ……196
2　英語館のカリキュラム ……203
3　英語教育の方法 ……207
4　試験 ……216

第6章　総括と今後の課題 …… 224
1　内容要約 ……224
2　今後の課題 ……229

序 論 中国における英語教育史の研究の動機と課題

1 研究動機と研究課題

日本の文部科学省に相当する中国教育部は2001年9月に「全日制義務教育 普通高級中学英語課程標準」(以下「課程標準」と略)を公示し、英語教育を正式教科として小学校3年から(主要都市では小学校1年から)カリキュラムに取り入れ、小、中、高12年間の一貫した英語教育指導体系を打ち出した。「課程標準」は生徒の総合的な言語運用能力の育成を目標とし、言語技能、言語知識、学習ストラテジーなど5つの要素にわたって学習目標を設定し、小学校から高校までの各段階の到達目標を1級から9級までの等級に分けて明記した。このように課程標準を少し見るだけでも、中国の英語教育政策が、これまでにない新しい展開を見せ始めていることが窺える。

一方2001年のWTO(世界貿易機関)加盟、2008年の北京五輪開催、2010年の上海万博の開催は追い風となり、今日の中国では空前の英語ブームが起こっている。英語学習人口は既に3億人を超え、さらに毎年約2千万人の割合で増え続けている。英語教育は中国の学校教育においてかつてない重要な位置を占め、英語教材、英語教育方法などにおいて抜本的改革が行われ、学生はこれまで以上の時間を、英語学習に費やす時代に突入している。一部の教育関係者や教育専門家は現在の英語学習・教育が過熱状態であると指摘し、またこれによって引き起こされた様々な問題や、これからの英語教育の進むべき方向をめぐる論争が活発になってきている。

しかし歴史を遡ってみれば、英語学習・教育熱は今に始まったことではなく、英語教育の草創期からすでに起こっていたのである。それは、1830~50年代の広州を中心地として起こった第1次英語学習熱、1860~80年代の上海発の第2次英語学習熱、そして1895年日清戦争後に全国的規模で発生した第3次英語学習熱である。それぞれは発生当時の社会的背景や、発生の経緯において各々の特徴を示している。そうしたことから、過去の英語教育を研究することによって、現在の中国で起こっている英語学習・教育ブームを冷静に見極めるための何らかの示唆を得ることができるのではないかと考えた。

中国の英語学習・教育の源流は遠く18世紀の前半にさかのぼる。当時の英語学習は貿易を契機とする、中英両国言語文化接触により生まれたピジン英語の学習であっ

た。このピジン英語は広州英語、上海英語両時代を経過し、初期の教会学校、官立学校における英語教育に多大の影響をもたらした。

ところで中国における従来の英語教育史研究は、1949年中華人民共和国成立以降の研究に偏っていると指摘できる。少しさかのぼった1912年清朝崩壊までの教会、官立学校における英語教育史研究があるが、ごく僅かである。とくに英語教育の草創期—ピジン英語時代の英語学習・教育に関する研究は、管見によれば、ほとんどないように思われる。すなわち、中国の英語教育はどのようにして、どういう形で始まったか、そしてどうのように発展をしてきたかという、清朝末期までの英語教育の研究はまだ十分とは言えない状況である。

本研究に関連する先行研究を検討してみよう。中国における清朝末期までの英語教育史を扱った主な研究としては、次の3つが挙げられる。第1は付克『中国外語教育史』(中国・上海外語出版社, 1986年)、第2は李良佑、張日昇、刘犁『中国英語教学史』(中国・上海外語出版社, 1988年)、第3はBob Adamson: *China's English: A History of English in Chinese Education* (*Hong Kong University Press, 2004*)である。

付克の『中国外語教育史』は、豊富な史料を駆使し、中国における外国語教育の大まかな流れを解明している。これは中国英語教育史研究に関する最初の成果である。しかしこの著作は主としてロシア語教育の歴史の解明に焦点を当てたもので、その中で英語教育史について副次的に論じたものである。清朝末期までの英語教育に関する記述は全体の約6パーセントにすぎず、しかもそのわずかな記述も1862年京師同文館設立以降の英語教育にとどまっているのである。

李良佑らの『中国英語教学史』は書名の示すとおり、英語教育の歴史のみを対象とした労作である。ただ、同書は官立学校の英語教育を中心に扱っていて、例えば教会学校の英語教育などについての論述は概括的であり、またピジン英語時代における草創期の英語学習・教育に関する記述はほとんど見当たらない。

アダムソンの著作は1949年以降の中国英語教育を中心に論述した興味深いものである。同書は1949年以降の学校英語教育に主眼を置き、英語教育のカリキュラム、教授法、教材について詳しく論じたが、それ以前の英語教育に関する記述は、総計214頁の本文の中でわずか13頁に止まっている。特に本論文の研究対象となる清朝末期までの英語教育についての記述はさらにその半分にも満たない。

上掲の先行研究はいずれも中国英語教育の歴史を扱った示唆に富む労作であるが、英語教育の源流、初期の教会、官立学校における英語教育に積極的に取り組んでいるとは言い難い。上において、清朝末期までの中国英語教育の研究はまだ十分とは言えない状況であると述べたのは、このことである。従って中国における清朝末期までの英語教育は未開拓の分野と言っていいと思う。

以上のことから、本研究では、中国における英語教育の源流を中国式ピジン英

語、つまり広州英語、上海英語に遡り、ピジン英語時代の英語学習書を検証し、さらに初期の教会、官立学校における英語教育の実態を考察するものである。

2 論文構成

本研究は、序論を除き6章から構成されている。これから具体的に各章の内容を述べたいと思う。

第1章では次の3点を明らかにした。

1) 中国式ピジン英語の前身であるマカオ・ポルトガル語の発生背景、経緯を考察し、中国人による最初のマカオ・ポルトガル語単語集『澳門記略』に焦点を当て、マカオ・ポルトガル語の実態を検証した。
2) 英米人の航海日記や旅行記、広州英語語彙・用語集、広州英語に関する論述などに依拠し、広州英語の発生、実態、変化の流れを究明し、さらにその特徴を分析した。
3) アメリカのPeabody Essex Museum所蔵のBryant Tildenの日誌や、イギリス人Charles T. Downingの旅行記、イギリス人Charles F. Nobleの航海日記などを用いて、当時の広州英語学習者の英語力を検証した。

第2章では以下の1点を明らかにした。

1) 「紅毛」類広州英語用語集の翻刻版、『華英通用雑話』、『英語集全』、『華英通語』、『英話注解』などのピジン英語時代の英語学習書を分析し、これらの学習書の種類、内容、特徴を検証した。

第3章では以下の3点を明らかにした。

1) 英文雑誌*Chinese Repository*及び*Hong Kong Blue Book*に載せられていた英華学堂、モリソン教育会学校に関する報告書を通覧し、初期の教会学校の創設経緯、目的、英語教育の内容、方法、英語人材の育成を考察した。
2) 1842~1877年のあいだで各教会学校の英語教育との絶縁傾向を考察し、さらにその理由を分析した。
3) 第1、2回全国各派宣教師大会の記録文書、中国教育会の報告書により、英語教育存廃を巡る論争の経緯を明らかにした。

第4章では以下の4点を明らかにした。

1) 朱有瓛主編『中国近代学制史料』(華東師範大学出版社、1989年)など先人たちが編輯した史料集を用いて、初期の官立外国語学校及び英語教育を取り入れた洋務学校の英語教育の目的、内容、方法などを解明した。
2) 各地の総督、巡撫の上奏文を駆使し、改革を行った旧式書院の英語教育の実

施情況を検証した。

3) 一部の新式学校の生徒募集公示或いは学校章程を取り上げ、新式学校の英語教育の特徴を考察した。

4) 清朝政府が制定した「奏定学堂章程」と「欽定学堂章程」を用いて、英語教育に関する規定・規則を検証し、小学堂及び中学堂における英語教育の実態を解明した。

第5章では以下の2点を明らかにした。

1) *W. A. P. Martin*の*A Cyde of Cathay* (Second Edition, New York, 1897)、Knight Biggerstaffの*The Earliest Modern Government School in China* (New York: Cornell University Press, 1961)、蘇精の『清季同文館及其師生』(私家版、1985年)などの史料を用いて、京師同文館の設立背景、及びその設立経緯を究明した。

2) 史料集『籌辦夷務始末』や、京師同文館の歴年の年間行事表『同文館題名録』、汪鳳藻の編訳した英文法書『英文挙隅』、斉如山の回顧録『斉如山回憶録』などに依拠し、英文館の教師・生徒、カリキュラム、教授法、試験制度を中心に英語教育の実態を明らかにした。

第6章は本論文が明らかにし得た点を5つの側面から整理し、結論を提示した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第1章　英語教育の草創期—ピジン英語時代

第1節　マカオ·ポルトガル語—ピジン英語の前身

1　マカオ·ポルトガル語の発生

ポルトガルと中国との貿易が確認されるのは1517年である。

1498年ヴァスコ·ダ·ガマ(Vasco da Gama, 1469年頃~1524年)の率いるポルトガルの船隊がアフリカ大陸南端の喜望峰を迂回してインドに到着した。ヴァスコ·ダ·ガマがアジアに直接貿易品を運べるインド航路を開拓したことは、ポルトガルの東方貿易に巨大な利益をもたらすことになった。1510年ポルトガルはインドのゴアを占領し、そこにインド総督をおいて東洋貿易の根拠地とした。翌年にはマラッカに進出し東南アジア貿易の拠点とした。

さらに1517年ポルトガル国王の使節トメ·ピレス(Thomé Peres、生没年不詳)を乗せた艦隊が、マラッカを出発し中国広東省の省都広州に現れた[1)]。ポルトガル艦隊は広州での交易自体は広州官憲に許可されたものの、ポルトガル使節が北京を訪問し、直接通商の願い出は明朝政府に拒否された。そうしたこともあり以後はポルトガル人は貿易拠点を浙江、福建両省に移し、中国人商人との私的な貿易を盛んに行った。

1557年ポルトガル人は広東海上において横行した海賊の討伐に功をあげ、明朝政府からマカオに定住を許された[2)]。さらに1578年にポルトガル人は明朝政府から広州一港に限定し往来貿易の許可を得た。こうしてポルトガルは外国人との貿易が厳禁されていた明朝の時代で初めて中国との貿易の権利を獲得した。ポルトガル人はマカオをポルトガル商船の停泊地、また商品の積み卸し場として利用し、中国・ヨーロッパ間の貿易を独占していた。

当時の明朝政府は中国人の国内での外国人との貿易を禁止していたのみならず、外国に出て中国固有の物産を輸出販売することも厳禁していた。ポルトガル人はそれを活用し、広州で金、生糸、糸織物などを安く購入し、それらをマカオへ運び、ポルトガル商船に積み込み、日本に輸送した。そこで中国から持ってきた商品を日本の銀、小麦、漆器などと交換し、巨大な利益を得ていた。同様の方法でポルトガ

ル人はマカオとマニラの間を往来し貿易を行っていた[3]。こうしてポルトガル人の活発な貿易活動によってマカオはますます繁栄し、その隆盛は1620年頃まで続いた。

1622年オランダは中国に初来航し、中国との貿易を開こうとしたが、ポルトガルの妨害のため実現できなかった。その2年後の1624年オランダは台湾を占領し、そこで中国の商人と貿易ができるようになっていたから、ポルトガルの中国貿易の独占権はついに破られたのである[4]。

ポルトガル人が中国に来航する以前から、ポルトガル語はインドまた東南アジアにおいて通商言語としてすでに使用されていた[5]。マカオに定住し始めてからしばらくの間は、ポルトガル人は東南アジアから連れてきた華僑を通して中国人との貿易交渉を行っていた。明朝政府は鎖国政策をとっていたため中国人と外国人の交流を極めて制限していた。そういうことからポルトガル人が中国語を学習することはほとんど不可能であった。

従ってポルトガル語が通商言語となり、そしてポルトガル語が現地の方言つまり広東語と混合されて、いわゆるマカオ・ポルトガル語(つまりピジン・ポルトガル語のこと)が発生するのである[6]。しかし、マカオ・ポルトガル語にしろ、ピジン・ポルトガル語にしろ、いずれも現代の研究者の間で用いられるようになった呼称である。初めてこの言葉に注目し、そしてこの言葉に名前をつけたのはマカオの初代同知(マカオの最高地方長官)印光任と三代目同知を務めていた張汝霖である[7]。印光任と張汝霖は彼らが共同で著したマカオ地誌『澳門記略』(1751年)の中でマカオ・ポルトガル語に言及し、この言葉に「澳(オウ)訳(イ)」と名付けたのである。さらに彼らは著書の末尾に「澳訳」の語彙表を収めた[8]。この「澳訳」またその語語彙集については後述する。

マカオ・ポルトガル語は上述のようにポルトガル語と広東語の混合したもので、そのイディオムも発音も純粋のポルトガル語より著しく転訛しており、新たにポルトガルから来た者には、ほとんど理解できない言葉であった[9]。しかしその一方、このマカオ・ポルトガル語は主に貿易をするために生まれた用語であり、語彙の数は非常に限られていた。そのため来華したポルトガル人をはじめ外国人には比較的短時間でそれを習得することができ、それを用いて中国人との貿易を行ったのである。

マカオ・ポルトガル語はその名の示すようにマカオで発生したのであるが、次第に広東まで広がり、中国人とポルトガル人、スペイン人(1575年初来航)、オランダ人(1622年初来航)など西洋諸国との間の通商言語となり、中欧貿易における重要な役割を果たした[10]。このように16世紀中ごろから中国と西洋との貿易における主な媒介言語は確かにポルトガル語であったが、モース(H. B. Morse)は*The Chronicles of the East India Company Trading to China 1635~1834*(1926)において、通商言語としてのポルトガル語に関して次のように記している。

The first requirement for a supercargo on English ships trading to China was a knowledge of Portuguese. For over a century from 1517, the only European ships to visit China were Portuguese, and their language became, to some extent, the lingua franca of the coast.[11)]

モースは、1517年から100年以上の間に中国を訪れたヨーロッパ船はポルトガル船だけであり、ポルトガル語がある程度中国の沿海部において通商言語になった。したがってポルトガルに遅れて中国に来航したイギリス船の大班(商船の最高貿易責任者)にとってポルトガル語の知識は必須条件であったと述べている。もちろんここで言うポルトガル語は純粋なポルトガル語を指すのではなく、これまで述べてきたマカオ・ポルトガル語のことである。

このようにマカオ・ポルトガル語は中国と西洋の貿易や交流における通用語として18世紀末ごろまで使用されてきて、重要な役割を果たしたのである。

2 マカオ・ポルトガル語に関する記述

(1)『澳門記略』—中国人による最初のマカオ・ポルトガル語単語集

マカオ・ポルトガル語に関する最も早い記載は、上述した印光任と張汝霖が著したマカオ地誌『澳門記略』(1751年刊)である。全2巻3篇からなり、その構成は以下のようになっている[12)]。

第1巻
「形勢篇」マカオの地理、気候、軍事防備
「官守篇」マカオの歴史的沿革、明朝、清朝のときの管理、法令また歴史事件
第2巻
「澳藩篇」ポルトガルとの貿易交流、宗教信仰、風俗習慣

そして「澳藩篇」の末尾にマカオ・ポルトガル語の単語集が収められている。

印光任(1744~1746年在任)、張汝霖(1746~1747年在任)はマカオに居住する外国人を管理するという澳門同知を相次いで担当した。そのために彼らは、当地のポルトガル人またポルトガル語との接触機会が多くなった。そういうことがあって印光任らはマカオ在任中、常にマカオ・ポルトガル語を収集、記録した。そしてそれらを語彙表の形で『澳門記略』に収めたのである。

単語集の全体は天地類(83語)、人物類(161語)、衣食類(52語)、器数類(48語)、通用類(51語)の五つに分類され、計395語が収録されていた。この語彙表はポルトガル語がわからない中国人向けであるから、すべて中国語で書かれている。まず中国語を示し、その後にポルトガル語の発音を中国語の広東方言で表記している。類ごとにいくつかの例を挙げておく[13]。

天地類：

天(消吾)	日(梭炉)	雨(租華)	澳門(馬交)

人物類：

皇帝(燕罷喇多盧)	母(買)	通事(做路巴砂)	蕃人(記利生)

衣食類：

布(耕架)	塩(沙芦)	糖(亜家喇)	鴉片(亜栄)

器数類：

箸(亜知己)	眼鏡(悪古路)	船(英巴家生)	桌(務弗的)

通用類：

買(公巴喇)	賣(湾爹)	学(庇連爹)	貿易(幹打刺度)

例えば中国語「天」(日本語の「空」を意味する。)の発音は漢字「消吾(ショウ)」と表記されている。学者Kingsley Boltonによると、この「消吾(ショウ)」に当たるポルトガル語は恐らくcéu(シェー)である[14]。また中国語「日」(日本語の「太陽」を意味する。)の発音は漢字「梭炉(ソロ)」と表記されている。この「梭炉(ソロ)」に当たるポルトガル語は恐らくsol(ソル)である[15]。このようにすべて中国語で書かれていた単語集は、マカオ・ポルトガル語を勉強しようとする中国人(つまり商人、通事、買弁、船員など外国貿易に関わる中国人)にとって恰好の教材となっていた。

著者の印光任・張汝霖はマカオ・ポルトガル語に対して「澳訳」と名付けて、その理由について次のように述べている。(〔　〕の訳文は引用者。以下同様)

> 定州薛俊著《日本寄语》，谓西北曰“译”，东南曰“寄”。(中略)从古邦畿在西北，不言寄。 名曰澳译殿于篇[16]。
>
> 〔定州人薛俊は彼の著書『日本寄語』で西、北方面の諸外国の言葉を「訳」と呼び、東、南方面を「寄」と命名した。ポルトガルは中国の北西に位置するため、ポルトガル語に対して「寄」とは呼ばない。したがって本書において澳門で使用されているポルトガル語を「澳訳」と呼称する。〕

「寄語」とは、すなわち「訳語」の意味である。実は『日本寄語』というのは書名では

なく、それは定州人薛俊が1552年に著した『日本国考略』の中に設けられた「寄語略」という章の内容を指している。その「寄語略」と呼ばれる章には、天文類、時令類、地理類、方向類、珍寶類、人物類、人事類、身体類、器用類など15の意義類別に、計359の日本語の語彙集が収録されていた[17]。語彙表はすべて中国語で書かれ、まず中国語を示す、そしてその後ろに日本語の発音を定海地域の方言である呉方言で表記している。地理類にあたるところからいくつかの例を挙げておく[18]。

地理類：

水(明東)　　海(烏彌)　　火(非)　　山(羊賣)

例えば中国語「水」(日本語の「水」を意味する。)の対応する日本語の発音は漢字「明東(ミントン)」と表記されている。同様に中国語「海」(日本語の「海」を意味する。)は漢字「烏彌(ウミ)」、中国語「火」(日本語の「火」を意味する。)は漢字「非(フイ)」、中国語「山」(日本語の「山」を意味する。)は漢字「羊賣(ヤンマイ)」と表記されている。

この日本語語彙集の編纂方法は、上記の印光任らがマカオ・ポルトガル語語彙集の編集において使用した方法と同じである。すなわち漢字を用い、外国語を注音するというやり方である。また章文欽教授は「日本寄語」と「澳訳」両語彙表を比較し、両者の語彙内容が同じあるいは近似的である単語の数は152語に達しているという結論を出した[19]。

語彙の内容・数、編集方法において両者がかなり近いという点から推測すると、印光任、張汝霖は恐らく薛俊の「日本寄語」を参考にして「澳訳」を編集したのかもしれない。

そして著者印光任・張汝霖は当時のマカオ・ポルトガル語の使用情況について次のように述べている。(( )は引用者注)

> 西洋语虽侏离，然居中国久，华人与之习，多有能言其言者，故可以华语释之……[20]
> 〔西洋の言葉はとても奇異であるが、昔から中国(すなわちマカオ)で既に存在していた。中国人が次第にそれを学び始め、その中で上達者が結構いる。彼らは西洋の言葉の発音を漢字で記録していた。〕

もちろんここでいう「西洋の言葉」はポルトガル語を指している。中国人は最初の頃、すなわちマカオ・ポルトガル語の教育体制も整っておらず教科書などもなかった時代に、マカオのポルトガル人との直接交流するなかで、見よう見まねでポルトガル語を学び、次第に聞いたり話したりすることができるようになった。その中で一部の中国人は彼らが聞いたポルトガル語の発音を漢字で記録し、それによってよ

り多くのポルトガル語を覚えようとしたのである。

印光任らが編集したマカオ・ポルトガル語単語集が、18世紀のマカオ・ポルトガル語の研究に、貴重な資料を提供していることは言語学者の間ですでに周知のことである。さらにこの単語集は初期の英語学習書の編纂にかなりの影響を及ぼした。以下において『澳門記略』に収録されていたマカオ・ポルトガル語単語集と、初期の英語学習書の代表である『紅毛通用番話』[21] 省城壁経堂(著者、刊行年代不詳)を比較し、両者の類似性を検証してみよう。

『澳門記略』の「男番図」(左)と『紅毛通用番話』の表紙(右)

両写真はともにKingsley Boltonの*Chinese Englishes : A Sociolinguistic History*(2003)より

1) 収録された語彙の数はほぼ同じである。『澳門記略』が395の見出し語を収録しているに対し、『紅毛通用番話』は372の用語を収めている。両者の収録語彙数の差はわずか23語である。

2) 語彙の内容は重なる部分が多い。両者に収録の語彙を比較してみると、見出し語のうち95語は同一である。例えば1から10までの数字、バナナ、黒、買う、来る、猫、犬、皇帝、椅子などの単語である。また意味的に類似の語は計16語である。両者を合わせると111の見出し語が共に両語彙集に収められ、それぞれマカオ・ポルトガル語単語集の総語彙数の28%、『紅毛通用番話』の29%を占めている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com